



# JAIF

国際結婚を考える会

Japan Association of Intercultural Families

会報誌第**13**号 [www.kokusaikazoku.com/](http://www.kokusaikazoku.com/)

[jaif@kokusaikazoku.com](mailto:jaif@kokusaikazoku.com)

**【特集】 国際家族の介護ストーリー**



Page	CONTENTS	
	<b>【特集】 国際家族の介護ストーリー</b>	
3	● <u>母のオーストラリア移住</u>	高山しの(会員)
6	● <u>「国際家族の介護体験」</u>	デニエル きみよ (会員)
8	● <u>「遠隔介護には日本の協力者が必要」</u>	かもめ (会員)
10	● <u>「親の世話：私の場合」</u>	ケリング眞理子 (会員)
14	<u>JAIFイベント報告</u>	イベント係
15	<u>編集後記   次号予告</u>	会報係

# 母のオーストラリア移住

高山しの(会員) オーストラリア在住

母は2017年にオーストラリアの永住ビザを取得しました。取得まで1年半ほどかかったと記憶しています。それまで申請しないとイケないね、と言いつつ、書類を揃えるのに手間がかかるので、延ばし延ばしになっていました。3ヶ月までならオンラインで電子ビザを取得して滞在できたので、それを繰り返している状態でした。



タスマニア旅行

(アザラシを見に行く船上の母)

それが、家族でタスマニアに旅行した時に母が滑ってこけて手の骨を折ったのです。あの時は救急車を呼んで大変でしたが、年齢が上がれば上がるほど旅行保険の値段も上がるだろうし、この先いつ怪我をして動けなくなるかもしれない、それなら家族と一緒にいられるように、永住ビザを取ってしまおうということになりました。

母は永住ビザを取得してから数年は日本とオーストラリアを行ったり来たりしていました。本格的に永住してくるにしても、それまでは徐々に慣れていこうという考えでした。ただ、滞在は3ヶ月までという制約がなくなりオーストラリアの公的健康保険にも加入しました。



タスマニアのアザラシたち

(母はこの後怪我はしましたが、アザラシはたくさん見られました)

# 母のオーストラリア移住

高山しの(会員) オーストラリア在住



英語クラスの人たちとピクニック（母は、「みんな、踊るの」と驚いていました）

オーストラリアでは、新しい永住者は決まった時間英語の授業に無料で参加できるという制度があるのですが、そのプログラムに参加して70代にして母は一年ほど学校に通いました。多くの新移民に囲まれて「日本の常識は世界の常識ではない」と70代にして初めて実感することになったようです。

本格的にオーストラリアに永住し始めたきっかけはコロナのパンデミックでした。2019年の終わりに家族で中国海南島に旅行し、そこから母は日本に帰国していました。年末に中国の海南島に滞在していた時には、すでに本土でおかした風邪が流行り始めているとニュースになっていました。2020年になって旅行が制限されるようになるのではないかと、などとニュースが飛び交う中、オーストラリアが入国制限を出す1週間ほど前にブリスベンに戻ってきました。永住ビザを持っているので入国はその後でもできたはずですが、隔離などとなるとストレスもかかるだろうし、お互いほっとしたものです。



家でたこ焼きパーティー（母は私の生徒たちにたこ焼きの焼き方を教えていました）

それから殆どすぐにパンデミックで外を出歩くことも制限されることとなりました。オーストラリアに永住するなり引きこもらなければならなくなっ、ストレスも溜まったと思いますが、適応能力が高いのか、それまで二国間を頻繁に往復していたので慣れてしまっていたのか、かなりスムーズにそれこそいろんな状況を楽しんでいるように思えました。私も母も料理が趣味ですが、日本にいたら手作りするわけないもの（雛豆で豆腐作ったり）を手作りしたりして、引きこもり生活をエンジョイしました。ベトナム料理Pho（ビーフヌードルスープ）をスープから作ろうとは、母がいなければ思いもしなかったかもしれません。

# 母のオーストラリア移住

高山しの(会員) オーストラリア在住

引っ越してくるにあたり、生活に必要なものを手に入れなければならないのは当然ですが、70代にもなると血圧が高くなったりコレステロールが上がったりと、何かしら不都合なこともあると思うのですが、まずこの薬を処方してくれる医者さんが必要でした。公的健康保険に加入してから、すでに私と同じ総合診療医（General Practitioner）に定期的に会っていたので、日本でこういう薬をもらっていた、などというと比較的に必要な処置をしてもらえました。



好きなサッカー選手と同じ背番号  
のTシャツを着てはしゃぐ母

今はYouTubeで健康に関する動画をみては、ハチミツがいいよ、とか、レモン酢がいいらしい、などと毎日言っています。日本にいる友人や親戚とLINEで話して、「人間、一回死んだらおしまいや。楽しみな損やで」といつも言っています。母を見ていて、楽しく生きるのに趣味は必要、食生活と運動は大切、と思います。母が永住ビザを取ってすぐにうちの老猫が亡くなったのですが、2年ほど前に新しい猫を迎えて、猫と遊んだりしています。

彼女が引っ越してきた当初は、家族の団欒も、みんなが一斉に日本語と英語とで話すのでパニックに陥ったものですが、最近はどうも母も私たちが英語で何の話をしているのかはわかるようになってきているようです。慣れない海外生活だったと思いますが、楽しみな損のスピリットで頑張っているみたいです。

# 「国際家族の介護体験」

デニエル きみよ（会員） フランス在住

私の母は大正9年生まれで、関東大震災、第二次世界大戦をくぐり抜けて生き延びた世代でしたが、その頃では珍しく音楽大学で好きなピアノを勉強できまして、卒業してから出征する前の父と結婚しました。戦後は父も無事帰還できまして、祖父母の近くに越して子育てしながら自宅でピアノを教えていました。

祖父母の介護が始まる前は、時にはヨーロッパに音楽の旅のグループ旅行に叔母と参加したり、60歳で運転免許を取ったりと好奇心も旺盛でした。祖父母を見送り、病気の父の介護を母と、日本で仕事をしているフランス人と結婚して家を出た私も協力して続けましたが、父は回復することなく70歳で逝ってしまいました。今となっては父にもっといろいろやってあげればよかったと今も思いますが、父が孫となる私の娘をととても可愛がっている姿を思い出すと少しは親孝行ができたように思います。

未亡人となった母は、元々のんびりした性格でしたが車の渋滞でもイライラせず、叔母やお友達を車に乗せて100キロ先まで高速道路にも乗り出かけたり、一駅先の商店街まで歩いて出かけたりして1人暮らしをしていました。そのうち海外赴任となった私達のところに、飛行機に乗ってフランス、エジプト、フィリピン、クエートと訪ねて来てくれて(途中からは私と一緒に来ることになりましたが)元々食いしん坊ですのでその土地の食事を楽しみ、歩いて一緒に旅行を楽しんでいました。

そのような母が60キロ離れた神奈川県の子供の家に電車とバスを乗り継いで泊まりかけで出かけ、起きがけに布団に足を取られ転倒して、頭も打ったとの電話が海外にいた私にかかりまして、あまりのことにすぐには状況が理解できませんでした。医者の家でもあり、近所の医者にも診てもらって、今は家で寝ているとのことであったので大事には至っていないであろうと思いました。

私は「なるべく早く帰国するようにするので、」と伝えて電話を切ったもののいろいろ想像して不安はつのっていきました。

そして帰国して母の元に行きますと、やつれた母は私を見るなり「助かった、」「頭が痛い」と言い、聴くとまだレントゲンも撮っていないとのことで驚きました。



フィリピンを訪れた在りし日の母

# 「国際家族の介護体験」

デニエル きみよ（会員） フランス在住

翌日大きな病院に行き、レントゲンで「大腿骨骨折で、明日手術になります」となり、そのまま入院しました。手術は成功して、リハビリ病院に移るまで入院して、その後リハビリ病院に1ヶ月近く入院して、退院すれば私が自宅に連れて帰ることになりました。リハビリ病院を退院するまでには杖をつけて歩行ができるようにリハビリを頑張ったようで、それからの回復は早かったです。

この時点で赴任先にいる夫とも話し合っ、子ども達も高校を卒業し親元を離れていた、今後2ヶ月とか私が日本にいる時には母は自宅で一緒に暮らし、私が海外に行く時には2ヶ月とか民間の老人ホームで生活できるようにする、ということであちこちのホームを探し、見学に行き面接してついに埼玉県ホームに決めました。その後も母の状態や自宅からの距離などのことからホームは幾つか変わりました。

身の回りのことはほぼ自立していて、頭もかなりしっかりしている方なので、候補のホームのホーム長や介護の職員の雰囲気も入所者の状況も判断材料となりました。

入所している期間は、お話やお散歩など一緒に行っていただけの方を探し、後でその時の母の様子をメールしていただいたり、親戚にも面会に行ってもらおうようお願いしていました。子ども達が日本に滞在する時は面会に度々行ってもらったりもしていましたので、このことは今でも子ども達にとってもよかったと思います。

いずれ私たちが日本帰国する時には母と二世帯で住むつもりでしたが、94歳で逝ってしまい、もっといろいろやってあげることが、親孝行もできたのではないかと今も自分に問うています。

国際家族にとって、介護とかになると離れて住むことの難しさはそれぞれのケースで違ってくると思いますが、それだからこそこれからの国際家族は地球家族として皆で協力して、情報を集め、繋がって助け合っていくことが大切だと考えます。



フランスのトゥルーズ東にある歴史的な洞窟を訪れた際の写真です。

# 「遠隔介護には日本の協力者が必要」

By かもめ（会員）アメリカ在住

私は2021年8月、父の亡くなる前日、父と会うことができた。父は、日本の病院に入院中。私はアメリカ。お見舞いに行ってくれた妹夫妻の配慮で、私もビデオ電話で面会に参加できるようにしてくれた。コロナ禍で、病院での面会も「禁止」の状態から「タブレット面会」が導入されるようになっていた。初めて「タブレット面会」の語を耳にした時、「タブレットを使うなら、ビデオ電話で海外の私も参加できる？」と妹に聞いた。「タブレット面会」とは、病院が所有するタブレット端末を使って、病院が用意した部屋から病室の入院患者と画面上で面会するというもので、私の参加はできないようであったが、その日は、スタッフが父の病室へ妹夫妻を入れてくれたので、妹の携帯電話を使って、ビデオ電話できるようにしてくれた。（後で聞いたところによると、最期が近づいてきているので病室へ入れてくれたらしい。）

父は、脳梗塞になって車椅子が必要となり、簡単に整理すると、脳梗塞で入院→リハビリ病院→介護老人保健施設（老健）→施設A→自宅でヘルパー訪問を受けて一人暮らし→転倒して入院→リハビリ病院→施設B→自宅へ戻る→肺炎で入院という流れとなった。母は先に亡くなっていた。

遠隔介護では、日本の家族が協力してくれることがとても重要になる。妹は実家から車で1時間ほどの、他県に住んでいたが、父の入院中などはお見舞いの他、実家を時々チェックするなどしてくれた。（日本では入院するには保証人の捺印が必要となり、そういう面でも妹に助けられた。）私が帰国している時は、私がバトンタッチで、病院に見舞いに行ったり、しなければならないことや決めなければならないことについて協力した。肺炎でやがては人工呼吸器につながり必要が出た時にどうするか？という決断もしなければならない。意識がある状態で人工呼吸器につながれると、大の男ものたうち回る痛さ、という論文記事を妹と読み、父に「万一の時に延命治療を受けたい？」と聞いた。そこまでしたくない、という意思表示だったので、それを病院に伝えた。

私がアメリカにいる間は、父が自宅で暮らしていた時は、時々私も電話していたが、歳を重ねると耳が聞こえづらくなり、テレビなどのボリュームを上げてある中、携帯電話の呼び出し音が聞こえないこともあった。そういう時は、家の固定電話に電話し、出てもらってから、「（無料通話ができる）携帯に今からかけ直すから、出てね」とお願いしたりした。施設や病院では、他の人に迷惑になるから携帯には電話するな、と言われていた。歳を重ねると、メールも使いづらくなった（コンピュータにごみメールがたくさん入り、使いにくくなっていた）ようだ。



# 「遠隔介護には日本の協力者が必要」

By かもめ（会員）アメリカ在住

私が帰国するためのアメリカ出発日に父が転倒し、入院する羽目になったこともあった（2019年夏）。実家で父に会うのではなく、病院で父に会うこととなった。私がいる間にお見舞いに行ける、ということが不幸中の幸いだったのかもしれない。とはいえ、妹がいろいろ対応、手続きしてくれたおかげで私も助かった。

その夏、夫は私より数週間遅れて日本へ到着した。夫との結婚を長年親に反対されており、「帰国するときは一人で帰ってね」といつも言われていたので、夫を連れて病院へ見舞いに行くことを少し躊躇ったが、妹夫妻に励まされて、一緒に病院に行くことにした。夫に対し、父はしみじみと「遠いところ、よう来てくれたな。ありがとう。」と言ってくれて、冷たい氷の壁が溶けるような気がした。私は日本では車を運転しないので、お見舞いなどは交通機関を乗り継いで出かけるのだが、その夏、日本に滞在している間、夫と二人だけでお見舞いに行くこともできた。父を見舞うだけでなく、病院スタッフから話を聞いたり、書類をもらったり、という重要性もある。

さて、ビデオ電話で最後に父と会った時、父は口をパクパクさせて何かを言おうとしていたが、声は出なかった。でも、何かを言おうとしてくれていることはわかり、ありがたかった。翌日、父が亡くなった、と妹から連絡が入った。

日本入国も、コロナ規制が厳しく、アメリカから帰国する日本人も、政府施設で3日間の強制隔離の後、自主隔離を続けることになっていた。今すぐ帰国するのは難しいが、葬儀はビデオ電話で参加し（参列している親戚なども画面上で私たちに挨拶してくれた）、納骨式に間に合うように帰国することになった。入国の数日前に、強制隔離が解除され、2週間の自主隔離だけで良いことになった。「自主」隔離と言っても、政府から1日3回はビデオ電話がかかってきて、実家の外に出ていないことをチェックされた。1ヶ月の滞在の半分がこの自主隔離となるのは、もったいないので、実家で自主隔離をしながら、物を片付けたりした。外出禁止だが、他から来てもらうのは大丈夫なことを人々に伝えておき、自主隔離期間も有効に使えるようにした。

# 「親の世話：私の場合」

ケリング眞理子(会員) アメリカ在住

去年の春、日本ではようやくコロナ禍が収まりつつあり、母のいるホームでも自室での面会が3年ぶりに再開されました。早速私は5月に帰国しましたが、帰国後2週間足らずで、私と妹との面会中に母は他界してしまいました。享年96歳でした。腎不全状態が1年半ほど続いていた母は、亡くなる数日前から呼吸器を使用していましたが、苦しそうな様子もあまり見せずに私達と話していた数分後、ふと眠るように逝ってしまったのです。その数ヶ月前から腎不全の数値は危機的状態だったので、一見元気になっているようで実は気力で頑張っていたのだと思います。

私の父は肝臓癌で62歳の若さで他界したため、61歳になったばかりで未亡人になった母は、妹が結婚して一人暮らしになっても一軒家で愛犬と元気にくらしていました。父が亡くなってから私は毎年一回は里帰りしていましたが、特に母にとっての初孫の息子が産まれてからは、毎年1、2回帰国して母と過ごすようにしていました。

総じて元気だった母も80代になると転んで怪我をすること等が増えてきたので、終の住処のことを親子3人で話し合った結果、妹の住むマンションの隣に建設中の住宅型有料老人ホームに入居することになったのは、母が84歳の春のことでした。ここでは、定期的に映画鑑賞やコンサートなどが行われ、レストランや近くのJR駅までのシャトルサービス等もあったので、母は数人の友達や親切なスタッフの方々に囲まれて結構楽しく過ごしていたようでした。私もこの時は施設の母の部屋に寝泊まりできたので、気軽に毎回長期滞在ができました。

2017年の春、母は外出中に転んで大腿骨骨折をしたため手術をしました。手術後は、施設内の一時介護室に移され、回復するまで介護スタッフの方々が世話をしてくださったので、私は母の部屋に寝泊まりしながら食事の世話、買い物、病院への付き添いなどをして7週間ほどすごしました。母は、この時は高齢にも関わらずリハビリも順調に終えて歩行器を使用して歩けるようになったものの、事故前までの要支援2が要介護1になり、買い物と掃除のために週一回づつヘルパーさんに来てもらっていました。

# 「親の世話：私の場合」

ケリング真理子(会員) アメリカ在住

2020年の新年に私が帰国して間もない時、丁度私と妹の外出中に母は歩行器をつい使わずに部屋で転倒し、左腕を骨折したうえ腰に複数のひびが入りました。左腕の手術は、途中まで腕は上がることに、高齢であることなどから手術はしないことになりました。

この時も母は一時介護室でお世話になったので、私は以前の時と同じく雑用係として母のそばで過ごしました。やがて腕や腰の痛みも癒えて自室に戻ることができた母ですが、左腕に力が入らないため歩行器をひとりで安全に操作することが不可能になり、関連系列の介護専用施設に引っ越さざるを得なくなりました。あいにくコロナが深刻になってきた2020年の3月でした。

コロナ禍の大変な時に新しい環境で過ごすことになった母ですが、親しみやすい明るい性格のおかげで数人の友達もでき、スタッフとも顔馴染みになって家族と会えない不満はあるものの、「今は皆同じ状態だから仕方がない」と達観しているようでした。新しい施設に移ってからは、左腕が不自由なために車椅子を使用するようになり、以前と同じ要介護1の認定で買い物と掃除の他に風呂の世話を週3回ヘルパーさんのお世話になっていました。

2020年以来コロナ禍が高齢者施設の入居者の健康に及ぼした悪影響は明らかです。外部の理学療法士さんの出入りが厳しくなり、リハビリプログラムも中止されたり回数が減らされ、母の日々の運動量が激減していました。又「社会的距離」をとることで他の方々と一緒に話しながら食事をするのも禁止され、各種イベントも中止になりました。そうした諸々の悪影響もあってか、2021年秋ごろから母の糖尿病が進行して腎不全になっていたのです。

私は、この期間は手紙や写真、小包をこまめに送ったり、電話や施設が行ってくれたSKYPEでの週ごとのビデオ会話を利用して母とのつながりを持つようにしていました。

# 「親の世話：私の場合」

ケリング真理子(会員) アメリカ在住

やっと面会室での面会が許可された2022年の5月に、私は2年4ヶ月ぶりで6週間帰国し、めっきり年取った母を見て胸が痛みましたが、支配人さんが外国から来ていることを考慮してくださり面会回数も30分の制限時間も多めに許してくださったので、とても有難かったです。

帰米後、私は伊豆の叔母とフロリダに住む息子に母の様子を知らせ、2022年のクリスマスに皆で母に会いに行くになりました。この時も部屋にはあがれず面会室での30分間の面会でしたが、叔母も息子も少しでもまだ元気な時に母に会えて本当に良かったと言っています。

私の場合、2度の大怪我の際の介護に関しては、母曰く「至れり尽くせり」の施設が主な役目を担ってくれたのですが、少しでも母のために何かと世話を焼く機会が持てたことは、母との貴重な思い出となっています。又、私の場合には妹が施設の隣に住んでいたため、母がこれ以外にも何度か短期間入院した時など、全て安心して任せることができたことには、とても感謝しています。

外国暮らしの方々には、日本の親の介護のために仕事を中断して日本に長期滞在された、という方々も少なくないようです。日本の友人達にも自宅で親の介護をしたという者が複数います。こうした方々に比べれば私は、妹や母のおかげで楽をさせてもらったと思っています。

海外に住む子供として高齢の親にしてあげられる最上のことは、なるべく顔を見せてあげ、共に過ごす機会をつくることではないでしょうか。私はこの点では、できる限りのことをしたと思っていますが、母存命の最後の帰国の時、もっと早く帰国しなかったことが悔やまれてなりません。

亡くなる1ヶ月ほど前から電話での会話中に音量が急に小さくなるのが時々あったので、私はその都度母にもっと受話器を口に近づけるよう注意していました。

母の話し声は、最後まで大きくはっきりしていたので、これは機械の不具合のせいだとばかり思っていたのです。実際に会ってペンを持つ手も危ういのを目の当たりにして初めて、受話器を持つ力さえも段々衰えてきていたのだと知り、ショックでした。

# 「親の世話：私の場合」

ケリング真理子(会員) アメリカ在住

電話やビデオ会話は、親との交流にとって誠にありがたいものではありませんが、身近での日々の観察には到底及びません。又親は子供に心配かけまいと自分の病気のことを割引して伝えがちですし、子供は子供でなるべく希望的観測を持つとしますので状況の客観的な把握はなかなかしにくいものです。

後悔することは多々ありますが、コロナ禍で親の死に目に会えなかった多くの方々のことを思えば、母の最後に立ち会えたことだけでも有り難く思うことにしています。

父が亡くなった時もそうでしたが、母が亡くなってから私にとってこの世の喜びが減ってしまったと実感しています。それだけ私にとり掛け替えのない大きな存在だったことの証明でしょう。私の最近の日々ですが、母の写真に向かって挨拶することから1日が始まります。

そして晩年の母にもらった「永遠」のデザインのペンダントをして母を身近に感じるようにしています。

亡くなった人達は、残された私達の思い出の中で、私達が生きている限り生き続けます。亡き父母が喜んでくれるように、彼らの思い出と共に毎日しっかりと歩んでいくつもりです。



# ★2023年12月～2024年4月のイベントを振り返る イベント係

## ◎2023年12月17日 オンライン会員交流会「国際」結婚の現実 参加者8名

会員のお嬢さんが日本で挙げられたすばらしい結婚式についてお話を伺いながら、アメリカにおける「国際」結婚事情や働く若者たちを取り巻く環境について情報を交換しました。

新郎新婦ともカルフォルニア在住ですが、新婦は日米ハーフ、新郎は日本人クォーター（父親は日米ハーフ）であるので、両家共、日本での神前結婚式を挙げられたそうです。このように日本文化を大切にするお二人の姿に感激しましたし、米国からの参加者からは日本観光では体験出来ない厳粛な神前結婚式に参列でき一生の思い出になったとの感想が多く寄せられたそうです。

移民大国アメリカでは、出身国の文化や宗教を保持しているケースもあるので、出身国の違う方との結婚は一種の「国際」結婚といえるかもしれません。

話題はシリコンバレーで働くお二人のIT業界でのレイオフについてなどにも及び、遅しく働く業界の人々の姿が垣間見えました。楽しい交流会でした。

## ◎2024年1月20日（土）JAIF会員オンライン新年会 参加者7名

自己紹介から始まり、国籍法に関する話題や配偶者やお子さんの国に関する話題もありました。興味深かった話題の一つは、食べ物に関するものでした。やはり健康を意識されている方が多く、国際結婚をしていて、配偶者の方が和食を好む、好まないというケースのお話や、海外で作るおせち料理のヒント（外国人の夫にも食べやすい）、アメリカに永住するか帰国するか、医療制度の日米比較、移民問題、夫婦間の役割分担など多岐に渡り、時間超過してお開きとなりました。今年が皆様にとって良い一年でありますように。

## ◎2月9日（金）第11回海外会員オンラインお茶会（親睦会）参加者9名

テーマ:「バレンタインのシーズン、愛情や感謝を忘れないために」（配偶者、家族・親族、近所の人、友人など）前半はテーマに沿って、一人ずつ順番に話をしました。居住国・地域でのバレンタイン文化（日本のように女性がチョコをあげる日?）や、バレンタインシーズンにしていること、思い出などをシェアしました。ロマンティックで心温まるエピソードがたくさんありました。

後半はグループに分かれて、それぞれマイナンバーカードについてや、日本での能登地震など災害時への備えについて住んでいるお国事情をシェアしました。

## ◎3月29日（金）オンライン 会員の旅行経験談 参加者11名

3名の会員に楽しかった旅行のお話を写真も交えて伺いました。

長年アメリカにお住まいの方は、日本に帰国の際にご家族と歴史の旅をされているとのこと、大変勉強になりいつか行ってみたいと思いました。

アメリカにお嬢さんご家族がお住まいの方は、カルフォルニアの西部に広がる砂漠のような地方を紹介してくれました。

アフリカ旅行に何度も行かれたとのメンバーからは、タンザニアのセレンゲティ国立公園での美しい夕日の写真や生き生きとした動物たちの写真を見せていただきました。

皆さん、いろいろな所にお出かけの経験がたくさんあり、楽しい旅行のお話でした。また、企画したいと思います。

## ◎4月21日（日）第5回JAIF2024年度オンライン総会

詳しくは会のホームページのフォーラムから第五回定期総会報告(2024年度)と2024年度総会資料をご覧ください。

「国際家族の介護ストーリー」に寄稿して下さった会員の皆様、ありがとうございました。それぞれのストーリーが胸にしみて感動しました。また、ご家族をお住まいの外国に呼び寄せた例も大変参考になりました。介護ストーリーは今後もまた取り上げたいテーマだと思います。

コールマンひろみ

7月に入り、日本の夏はますます暑くなってきました。皆さんの住まれている国ではどんな夏をお過ごしされているのでしょうか。僕の奥さんはリトアニアという寒い国で育ちました。日本の夏は、彼女には耐えられない暑さのようです。2025年、夏のリトアニア旅行を考えています。今から楽しみにしています！

三好 郁也

次回予告 | 会報誌第14号 (2024年11月30日発行予定)  
特集：●『国際家族の二拠点生活』



国際家族のライフスタイルは実に多様です。夫の国に住んでいる、妻の国に住んでいる、あるいは仕事の関係で世界各地を移動してきたご家族もいらっしゃいます。一年の内、二つの国で過ごしている方がいらしたら、ぜひその生活について教えていただけませんか？

あるいは、これから二拠点生活を計画している方、かつて経験されていた方、メリットとデメリットを調べて悩んでいる方などもご意見をお寄せください。沢山の寄稿をお待ちしています。

会報誌係edit@kokusaikazoku.com までご連絡ください。

締め切りは2024年10月31日の予定です。

三好郁也、コールマンひろみ